

# 針葉樹會報

復刊第22号



1968.6



発行日

1968年6月30日

発行所

針葉樹会社

印刷所

錦光社

## 針葉樹会報

復刊第22号

編集人

東京都台東区台東

3-20-6

平川紀男

### 北秩父アルペン・ドライブ

大賀二郎

（）関東のチベット

ハマヒラ鉱泉に泊ってスワサンに登ることにしたと、中島から電話がかかってきた。倉知には、那須の三本槍と聞いていたのだが。まあ、何でもよろしい、近い方がいいではないか。運転するのはぼく一人なのだから。

それにしても山の連中というのは、どうしてこうルーズなのだろう。この電話のとき、集合場所などをちゃんと打合せ、山田さんと倉知には中島が伝えることになつていたのに、その日の朝、倉知から、

「どういうことになりましたか、」とたずねてきた。

一時半に東京駅だと教え、大丈夫かいなど咳きながら愛車サニーを丸ノ内中央口に乗りつけると、山田さんだけはちゃんと来ておられる。当の倉知が来て中島が来て、

クルマが動き出したのは二時近かった。

動き出してしばらくは、ドライバーは山やに対して、あるコンプレックスを拭い去ることができなかつた。まづ、服装がいけない。こちらは、トランクに山道具を積んでるとは云え、背広に革靴、さつきまで仕事をしていくことは云々、お客様たちは思い思いましたというスタイルなのに、お客様たちは思ひの山姿（それが又、三人ともえいかつこなんだな）にビ

ブランパキで、キャシャなサニーに乗り込んできたのである。わが山服に着換えし姿を思い浮かべれど、今はすたれたトレーンカーチ、手入れしてないビブラン靴、うすっぺらなセーター、シャツ。雪があつたらやめて帰ろう式の準備しかない。

そして何よりも、実績。こちらは年に二、三回、冬山。向うは毎月のごとくで、しかも冬あり。現役とO.B.の差。アルピニストと家庭人の差。

でも山田さんは、十五も年上の初老エコノミストだ。俺についてゆけないわけはあるまい。と、山田さんを唯一のよりどころにして、重い腰を上げてきたのだ。今更クヨクヨしなさんな。早く悪路にならないか、得意のアルペンドライブで、劣等感を吹き飛ばそう。

ところで今日の目的地だが、中島が望月さんに笑われた話をした。

「ハマヒラ鉱泉、と云つたら、浜平（ハマダイラ）だ、スワサンと云つたら、あれは諏訪山（スヤマ）と云うんだと、直されましたよ。」

諏訪山と云つても、知らない方が多いでしよう。標高一五四九・四メートル。北秩父の盟主ではありません。盟主両神山の西北にあって、神流（カンナ）川の源流に派生した淋しい山です。

この山に入るには、あとで浜平鉱泉のお力ミさんに聞いた処によると、高崎線の新町からバスで藤岡に行き、藤岡で乗り換えて鬼石（三波（サンバ）石で有名）を通り、神流川沿いに武州街道を西に辿つて万場に行く。万場でもう一

度バスを乗り換え、刀根平橋という終点まで来、更に三糠歩いて武州街道が十石峠に登るのを見送り、南に折れて一糠でようやく浜平鉱泉に辿りつく。東京を朝出ても夕方になるので、その晩は鉱泉に泊って翌日諏訪山に登る寸法になる。それほどまでしてくる人は少ないでので、この辺は関東のチベットといふそうだ。

よくもこんな山を探してきたのは、文献をしつこく調べるのが習い性となつてゐる倉知だ。クルマで行けて、登るにラクで、面白そな山。附近に叶山のビルディング・フェースとか、二子山のバットレスとかがあるし、両神山を近くで見たい、という狙いだ。この山ならば誰も登っていないと思ったが、さすがは大先輩、望月さんと藤島さんは、他日すでに登つておられる。(ということを、記録の片すみから見付けてくる人も居る!)

ピュンピュン飛ばし始める頃、車内にブランさて、クルマが戸田橋を出外れ、中山道をデーの匂いが漂い始めた。深谷のドライヴィングで水割りが入り、紫煙もうもう、ワイワイガヤガヤ、車内はパーの雰囲気になってきた。武州街道に入り、鬼石の先きで舗装が切れると、雨が激しく降り始め、闇が濃くなつた。

しかし、神流川が蛇行するまゝ、道も右に左に屈曲し、次第次第に高度を上げてくると、運転が楽しくなつてくる。ライトをふりかざし、ワイパーの往復の間から、フォグラランプの橙色の光りをすかして路面の凹凸を読み路肩を読み、砂利をはじき落石を避け、直線では六、七十糠にスピードを上げ、闇のヘアピンカーブに四、五十糠でつっこんでゆく。泥のしぶきが屋根まではねる。こうなつてくるとコンプレックスは一掃され、わがテクニックに酔つた心地になる。

お客様たちも頑張つて飲んでいる。手濡らし顔に飲ませ、それでも揺られながら執拗にグラスのやりとりをしている。

一時間ほど悪路を走ると、刀根平橋に着く。シャーリングに降りた山田さんが、星が見えたと云う。しかし、風防ガラスにぶつかってくるのは、細かいながらもたしかに雪だ。山田さん酔つてからな、と、つい一言多かつたら、山田さん憤然として、いや星だよ、俺

大きなダムが出来てゐるらしいが、定かには見えない。この分なら明日は沈没、と劣等感氏はホッとする。登らなければついてゆけない悲哀を味わうこともないからだ。我ながら情ない安堵感。

## 目 次

北秩父アルペントライヴ

大賀二郎 (1)

遭難報告・五月の鹿島槍

儀 昭 (6)

ウイークティー・クラブ結成趣意書

五色ヶ原に行きませんか——友田 (10)

純一君墓前山行のお誘い

(1)

ヒンズーキシユ通信(3)

倉知 敬

(11)

会務報告

中島 寛

(15)

編集後記

(16)

は見た、と主張する。浜平で降りるなり空を見上げて、どうだ星だぞ、酔つてたつてまちがいないんだ、といまいましそうにダメを押される破目になつた。その通り、寒気きびしく、漆黒の空に星がまたゝく。関東のチベットでは、不思議なことが起るようだ。

(二) 諏訪山から秩父へ

翌朝、ぼくは寝不足だった。宿の炬燵で倉知を雪隠詰めに破るのに、昨夜十二時すぎまでかかったからだ。両者入玉の大勝負だった道は、北側の谷をつめるルートなので、宿の主人が、

「今頃が一番歩きにくい。上は雪で、軟い  
かと思うと下が凍っていて、つるつと滑る。  
山仕事の人たちもそう云います。」と云った

とも、心にのしかかる。

「今日はこれまでにするか、」と呟くが、誰も相手にしてくれない。頼りの山田さんまで、さっさと行ってしまう。

一時間ほどでルートが沢筋に入ったとき、二身長ぐらいのアイス。フォールにぶつかった。青氷が寒々と光り、棚にはべつたりと雪がついている。先頭を歩いていたぼくは、捲き道を眼で探した。倉知に、

「ぼくが居るよって、グリーベルが泣いてますよ。」と云われ、渋々ステップカットに

それでも、いやいや辿り出した残雪の尾根道は、樹林が静かで気分が良かつた。さぞ紅葉が美しかつたろうと思われる。木立の間を風が音立てゝ吹きぬける。あと一時間に至つたり、一時間半になつたりする指導標にエングを云いながら、二時間足らずで三笠山のホコラに出た。ホコラの前に三角点がある。伐つてあって、眺めがいい。やっぱり来てよ

ますます寒く、倉知に生煮えのラーメンを喰わされて、いる間に、食器の紅茶が凍る有様なので、もう二度と来ないな、と捨てりふを残して、下山にかかった。下りは元気な頃から苦手だった。滑っては、皆にシロリと見られる。

二時間ほどで浜平鉱泉に着き、ビールで乾杯。誘惑に耐えかねて、ドライバーもコップ

かかる。馬穴のように堀るので、遅い。背中に、山田ファミリーズの批判的な視線を、痛いほど感する。その内、皆がてんてにステップを切り始め、遊びながら登る雰囲気になつて、不肖のトップは解放された。やれやれ。

それから又一時間、ジグザグ道を急登すると、稜線に出た。まばらな林で、落葉が深い諫訪山は目前にある。長尾々根から尊仏小屋の方を見上げた感じの、イカさない山だ。足

しない。両神山は、さすがに山らしいかっこをしているが、少しあしか見えない。浅間と妙義が北にちょっとびり見えるが北アは曇っている。八ツも鉛色の雲の向うだ。むしろ目を引くのは、東の方の異相の岩山で、岳人のスケッチと照合すると、二子山の北面らしい。台状の岩壁に切れ込んだV字の窓が印象的である。

ますます寒く、倉知に生煮えのラーメンを喰わされて、いる間に、食器の紅茶が凍る有様なので、もう二度と来ないな、と捨てりふを残して、下山にかかった。下りは元気な頃から苦手だった。滑っては、皆にシロリと見られる。

二時間ほどで浜平鉱泉に着き、ビールで乾杯。誘惑に耐えかねて、ドライバーもコップ

かる。馬穴のようにならうので、遅い。背中  
かつた

本當

に二杯。すこぶるうまかった。

ハブボルトを締め直し、ウインドウオッシュの水を補充して、三時出発。

昼間は却って走りにくい。交通量が多いしとくに部落の中は、子供が飛び出してくるので、三、四十糠のスピードに抑えざるをえない。二十分ほど往路を戻ると、神ヶ原である。右手から沢が入っていて、合流点の背後にゴツイ岩峯がそびえている。さっき二子山だと思った奴だが、これこそ「叶山ビルディング・フェース」だった。こゝで武州街道と別れ、志賀坂峠越えを試みることにした。バスが通っているらしいが、ぬかるみや雪があったら、チエーンを持たないサニーでは、まず越せない。不安はあったが、まよよ、とハンドルを右に向けた。

案ずるよりは易しく、舗装はないがいい道だ。直線で思い切り引っぱってはカーヴの寸前で速度を落し、外側の後輪を路肩の盛り上りからタイヤの巾だけ内側にもってゆき、ハンドルを極めてアクセルを踏み込むと、後輪が横すべりしながらきれいに路肩に乗って、スピードを増しつつカーヴを抜ける。こうすれば次の直線ではすでに十分な登坂のスピードになっている。スローアン・ファーストア

ウトの原則に忠実に、わずか六糠で五百米の高度差を一気に駆け上り、十分そこそこで峠のトンネルに飛び込んだ。

トンネルを出ると、早、目前には秩父の景観がひらけている。足もとから東へ細い谷がのび、谷ぞいに僅かばかりの耕地と人家が連続している。谷を目がけて、急坂を下る。左へ左へと深いカーブをまわり込むと、眼前高く、二子山がアラモの塔のように浮かび上った。夕陽にくつきり照らし出された岩壁は、四、五十米の高さだが、部厚く巾広い。岩の基部は道路から一投足の距離にあり、間にはまだ夕陽にくつきり照らし出された岩壁は、四、五十米の高さだが、部厚く巾広い。岩の基部

。五十米の高さだが、部厚く巾広い。岩の基部は道路から一投足の距離にあり、間にはまだ夕陽にくつきり照らし出された岩壁は、四、五十米の高さだが、部厚く巾広い。岩の基部

げ、数時間もすれば別の山群に入つてゆく。この機動力がアルペンドライヴのだいごみであろう。

### （三）柿原先輩

秩父の駅に着いたのは、六時少し前だった。秩父に来たりて柿原先輩を訪ねずというわけ

わけではない。しかし、いくら「秩父の柿原さん」と云つても、遠くからネオンが見える地」だというが、それがどこかは分らないので、駅の事務所にすかずか入つていった。ひ

まそうな駅員が五、六人たむろしていて、「うんのお宅はどちらですか」と大きな声で訊く

と、ピンとした空気が流れて、一番立派な帽子の小父さんが電話器にとびついた。そして

ご子息の和夫君が迎えに来てくれることにな

と、ピラミッドが、暮れんとする空に切り立つて、美しい。奥武藏の低山と軽視出来ない立派な山頂から遠くに望んだ岩峯を今は眼前に見上

り右手に、両神山のシルエットが高く姿を見せる。残雪が山の印象を強めている。そして、小鹿野から小さな峠を越えると、秩父盆地だ。つた。

この山が車窓から去ると、反対側、つまりからタイヤの巾だけ内側にもってゆき、ハンドルを極めてアクセルを踏み込むと、後輪が横すべりしながらきれいに路肩に乗って、スピードを増しつつカーブを抜ける。こうすれば次の直線ではすでに十分な登坂のスピードになっている。スローアン・ファーストア

日曜日なので、柿原さんは図書館に行っておられたが、ご子息の自転車についてわれわれがお邸に行くと、もうお帰りになっていた。

七時までという約束で上りこみ、お酒と、奥様手づくりのご馳走をどんどん戴く。

柿原さんは静かな口調で、秩父の山々のこと、八年も戦争に行っていたこと、ガルブレイスの原書を読んでいること、等々、淡々と話をして下さった。部屋には塚本閣治の絵（写真ではなく）とか、増田四郎先生の絵にて珍しかった。

時あたかも金の取引停止のさ中であり、マルクス経済学がこの問題に関して無言であるのは面白いという柿原さんの提言から、中島と山田さんが議論を斗わし、はからずも山田亮三先生の解説を拝聴する事になり、一橋大生の和夫君も興味深そうだった。

和夫君は「平凡な名前だがね、平和が何よりもいいと思ってつけたんだ」と柿原さんが仰言るように、苦労を重ねて復員されたあとのご子息である。帰るによき故郷あるせいか、時の予定を八時十五分まで超過し、再訪を約静かで明朗な、勉強をよくしそうな好もしい学生だった。柿原さんも可愛くてたまらない様子でさかんに酒を注いであげている。和夫君の名前の話から、牡丹江方面からの延々たる引揚行のお話になった。ある経由地の国府軍に李鴻章の血縁という立派な将軍が居り、

接衝に当った柿原参謀らに、ともかく早く帰

四十分だった。

れと、好意に満ちた指示をしてくれた。といふのは、八路軍が早くも各地に結集し、中国に向っていた。（秩父のガソリンで走っているわけだな）と思つた。秩父の空氣と、ノーブルな柿原家の雰囲気が思い出された。車内にはまだ酒の匂いがしみついていた。

これは中国人同志の話であつて、あなた方日本人には関係ないのだ、という考え方である。

「これこそ、暴に酬ゆるに徳を以つてす、と  
いう中国の大人の片鱗に触れた気がしたね」  
と、柿原さんは感慨深げだった。

面白かったのは、昨秋の穗高懇親登山の帰りのこと。松本のホームを、村尾さんの乗つた汽車と同時に正反対に発車して別れ、長野から熊ヶ谷に出て「あとは自分の電車で帰ってきた」話。こちらは自分のクルマで帰ってきたのだが。

話題はつきずお酒はますます尽きないが、あとはクルマで飲んでもらうことにして、七時半秩父出発。無人の秩父街道を百糎でとばし、中山道も快調に走って、浦和の中島宅が丁度十時。ダウン寸前の倉知道を百糎でとばし、中山道も快調に走って、浦和の中島宅が丁度十時。ダウン寸前の倉知

なお、返信用葉書同封致しておりますので、折返しご返信お願いいたします。

### 針葉樹会総会のお知らせ

昭和四十三年度針葉樹会定例総会を左記の通り開催致しますので、是非ご参集下さい。

記

日時：七月十二日(金) 午後六・三〇  
十九・〇〇

場所：如水会館南北日本間

議題：一、昭和四十二年度活動総括及び決算報告

二、今年度活動計画及び予算案  
三、幹事交代



た。「通過困難」とあつたが、なるほどナイフリッジで、ニゴリ沢側は、垂壁となつてゐる。キスリングでは無理だが、のちの為にとザイルを出しかける。ちょうどその時雨がパラついてきたので、深入りはよそうとすぐ帰途につく。一〇・三〇帰幕。この日、戸川が入山し、テントは一層にぎやかになつた。

ないといふ確信が深まっていくのだからカナ  
シイ。今日の上級生の不出来、二年生の頑張  
りをみて鹿島槍を二パーティに分けて登頂す  
るよりは一回で済ませるほうが得策と考え、  
明日全員同時に登頂を決めて就寝。

一一・三〇下降開始。ふんだんにザイルを使つた。緑山岳会の六人パーティに会い、天狗尾根下部の様子を聞く。雪庇に亀裂が入つて悪いという。冷たい風に吹かれながら、一五・二〇帰幕。横にテントを張っているパーティがある。夕刻に至り、すっかり晴れ上つた。冷え込みも厳しい、明日から下山なので、大

二十九日 六時に出る用意をしたが、雨が激しいので待つ。気温が高く、五竜東面がみえたりかくれたり。八時すぎに軽く食事して九・四〇出発。テント場尾根の踏跡伝いに下る。北壁にこだまする雪崩の音を聞き、暑い暑いを連発しながら、カクネ里を歩く。蝶型岩壁の中央は、まるで滝のように落ちている。ルンゼ下一・一五着。ルンゼに入るのは、どうも気がすすまないので、左側の不明瞭な稜伝いに、ダイレクトに天狗の鼻に出た。重い雪の急斜面に、重荷のラッセルとしごかれた。テントに入ったのが一五・三五。荒沢の奥壁、爺岳をあきずに眺め入る。荒沢尾根には茸雪の残ガイ。山田亮三先輩が、針葉樹十一号に、「昨年は駄目だと思っていた壁が、今年は登れるかもしけぬと思われてくる」と荒沢南稜の登攀を回顧しておられるが、三年目ここからみる度にどうしたって登れそうに

凄絶な形相に、身も心も引き締まる。この連休では、私たちが初トレース。鼻にも一橋山岳部のテントがひとつ。最低コルで天気悪化の兆し。しばらく様子を見る。落ち着きそうなので、登高開始。ザイルは一本七〇米、フルに活用して、時間のロスを少なくする。小舎岩着九・〇〇。のんびりと昼食。雪の状態もよくて、今日は北壁も静かだ。東尾根は繁盛しているらしくにぎやかなことだ。すぐ上の岩壁は、固定ザイルを使って右にトラバース、さらに直上したら、雪が多くて岩登りはなかつた。二番目の岩場はノーザイルで通過した。荒沢の頭からはトレースがあつて、難なく北峰に立つた。（一一・〇五）。頂上直下のナイフリッジはなかなか立派であった。先行の人たちにラツセルの礼を述べて、昼食。ガスのお蔭で、何も見えない。南峰はよした。

「メテー」と耳をふさいでいる。八時就寝。

五月一日、夜空の星が冴えている。四・四〇徹収して出発。第一クロアールまでの悪い部分を、雪の安定している間に通過したいので早立ちとした。雪はクラストしていく、アイゼンのツアツケが快適に喰い込む。第二クロアールは、固定ザイルを借用して通過少し下のスノウリッジで休息。無風快晴、下山とあって、皆はしゃいでおり、注意する程度でした。中村がキジうちにいったので、随分ゆっくりと休んでいました。ここを歩き出して十分と経たないうちに、事故がおきました時間は五時四十五分頃と思います。第一クロアールの少し上で、最初マガリ沢に二米程斜下降し、次に荒沢側にトラバースするとところです。雪庇の風陰側を歩くのですが、しつかりした雪の階段があつて、難なく通過でき

歩いていた中村が「アッ」という声と同時に  
もんどりうつてマガリ沢側に転落したのです。  
戸川が「ストップ」とどなりましたが、宙に  
浮いた彼は、途中の太い樺の木にザックから  
ぶつかり、大きくバウンドして、私たちの視  
界から消え去りました。「オーケー ナカムラ」  
の声、只空しく響くだけです。すぐ僕・戸川  
で救援に向い、他是登ってくる人に連絡を頼  
むことにして、絶体動かないようにと云い渡  
して、ザイルにつかまりながら五十～六十度  
程の斜面を下り、彼の落ちた跡を忠実に辿る  
ことにしました。ザイルはあわせて一五〇米、  
薬品を携行して慎重に下ります。八十米程で  
雪渓に入りました。雪渓からは落ちた跡があるの  
ですが、十五米程で岩の部分があり、その間  
彼の跡はありません。それでも、ここで致命  
傷を受けたなどと思い浮ばず、彼は、意識を  
失っているか、声も出せない程の大怪我でウ  
メイテいるのだろうと考え、先を急ぎました。  
やや下で、突きささっているピッケルを拾い  
ました。尾根から他のパーティが、私たちを  
みて、コールをかけたが返事はなかつたこと、  
そこは危険だから下るのはよせと教えてくれ

ました。（早稲田岳友会）でもそんな悠長なことは聞いておられません。私は一人先を急ぎました。彼は岩と一緒に落ちたのか、雪面は深くえぐられています。やがて散乱したザック・テント・ポールをみつけました。そして、六時半、中村をみつけました。彼は上向きて頭を雪塊につけ、足を斜め上にして静かに横になっていました。「中村」と呼びかけ抱きかかえます。鼻と口から血を吐いて、顔中血だらけです。「中村、中村」と叫びながら脈をとりました。手首では反応がありません。それで、胸を開け、耳をあてがいましたが心臓はとまっていました。最後に瞳孔をみました。それはゆるんだまででした。時に六時三十五分。はるか上にいる戸川に、死を告げ先程のパートィに援助を頼むよう伝えました。そして、彼の顔を、タオルで拭いてやり目を撫でさしり、口を閉じさせました。その時すでに足が硬直し始めていたように思います。戸川は応答ないので下りてきます。中村は今日、テントの本体とポールを持っていましたので、彼の遺体を一橋山岳部のテントで包んでやろうと思い、戸川にテントをさげてきてもらいました。顔を覆うのは、私の汗くさいタオルで我慢してもらいました。戸川が

「畜生ッ」と云つてわめいています。二人で左岸の安定した場所に移そと試みましたが重くてどうにもなりません。そこで棚をつくり、テントにくるんで安置しました。戸川に散乱した彼の遺品を回収してもらい、私は遺体が流されないようポールを横に差し込んだり、雪をかけたりしていました。陽も高くなつて額に汗がふきでます。山は穏やかに静まり返つていました。私は、中村が落ちる前以上に、安全確実に下山する手筈を考え、それからのこと思いめぐらしていました。涙する気持にはなれませんでした。

×            ×            ×

今回の遭難の原因は、本人の不注意と、それをカバーできなかつたりーダーたる私の判断の甘さ弱さといふことに尽きると思います。中村は、この四月十五日、二十回目の誕生日を迎えたばかりで、新潟高校で三年間山岳部をやり、主将もつとめていました。雪山（白馬岳・医王山など）岩登り（烏帽子沢奥壁・チンネ左稜線など）の経験もありました。より高きものを追求していく限り、危険はつきまとっています。私たちは、厳しさを忘れていたようです。私が入部して以来、大きな転落・滑落は十指にあります。なかには生き

ているのが不思議なものもあります。その全てを同質のものと解する訳にはいかないにしても、とにかく落ちることはよくありません。安全性をと叫びながら、この様です。山岳部の体質と何か関係がないかどうか。新制大学になつて以来、初めて死者を出した此の機会に、山岳部の在り方を根本的に検討しなおして、再認識する必要があると思います。

× × ×

遭難発生以来、先輩の皆様には多大の御世話になり、御心配をおかけしました。あらためて厚く御礼申し上げます。経過報告書も費用の関係上、拡大評議員会にみえられた皆様にのみ限り、他の皆様には失礼しましたことお詫びします。

### 遺体収容等日誌

同パートイは遺体確認後天狗尾根を通りかかる長崎山岳会の石川・東両氏に東京本部及び大町警察署への連絡を依頼したのち、下山開始。ルートを違え、一九・四〇 大谷原鹿島造林小屋着。鹿島部落狩野氏宅で荷を解いた後、僕、大町警察署に出頭。(二一・三〇) ラジオニュースで知ったという山田亮三。

大橋喜治両OBに会い、全般的打合せ。すでに救援体制が整えられつつあった。現地連絡力者平林氏には関係諸方面の手配で援助していただきた。

五月二日、関部長・甘利・石和田OB、また御遺族が夜半よりエコノミスト村着。早朝までに在京OB 続々到着。

× × ×

協議の上、三名(中島寛・佐藤之敏OB・僕)救援隊参加者(大学関係)

現場に急行。夕刻までに、三十米程引き上げ、ルート工作をした。その後、高崎俊平OB 藤原・今泉が、テント・食糧をもつて一九〇〇米地点に幕営合流した。他は、荒沢出合まで登行幕営。

五月三日、八・一〇 テント場に引き上げ終了。あとは荒沢パートイが中心となつて下

東京で連絡等にあたつた

山田亮三・関恒義・甘利仁朗・石和田四郎  
大橋喜治・木村( J A C 名古屋支部)

中島 寛

石 弘光

大賀二郎

長沢道彦

佐藤之敏

小島和人

山本溢弘

高崎俊平

佐藤久尚

原 博貞

石田信隆

齊藤 正

加藤正己・藤浪育夫・現役俵昭以下全員十

二名。

横山院一・吉田義則・山本健一郎・池知昭

洋・平川紀男

× × ×

なお、五月九日午前十時より、新潟市念佛寺において、中村家告別式がもたれ、針葉樹

会から、山田亮三・関恒義・中島寛。  
在新潟の山元淑弘・三股宏・及び現役全員

が参列した。

警察・医師により検視。死因は頭部打撲及び頭蓋内出血であった。そのあと納棺。より読經。ひき続き通夜にうつる。後刻、下川又寛氏・平林氏夫人、弔慰にこられる。

五月四日 七・〇〇 大町市火葬場にて荼毘

に付される。午すぎ遺骨は、故郷新潟に向った。

## ウィークデー・クラブ結成 趣意書

最近、日曜祭日は山が混むので、週日に出かけたいと思ひます。週日勤務に特別拘束されない自由業・自営業の会員はもとより、拘束される方々でも有給休暇をさしあって、静かな山行を気の抜けない会員同志で楽しみましょう。年代のへだたった会員でも、わずか一回の山行を共にすることによつて親しみはぐっと増します。

私が学生だった約三十年前でも、先輩と学生はさかんに山行を共にしたものですが、ですから会員数のふえた今では、皆さん行く気になつて足まめに出かければ、多くの計画を実行できることゝ思ひます。差し当り第一・

第二の両回の計画を発表しますから、御都合のつく方はそれぞれの幹事に連絡のうえ、ぜひお出かけ下さい。

### 第一回

七月十五日(月)奥多摩で発会式前夜祭  
〃十六日(火)" 沢歩き、日帰り参加可能

幹事(主) 石 弘光・九二〇一五六二三

(副) 久保 孝一郎・四六一一四七六〇

### 第二回

八月十五日(木)十七日(土)立山五色ヶ原友田慰靈祭

幹事(主) 山 田 亮 三・五〇三一一八〇八  
(副) 久 保 孝 一 郎・四六一一四七六〇

(久保記)

昨年の秋、前田、長沼、古沢三君の追悼碑が笛吹川に完成、肩の荷の一つがおりました。

ついでにと、何ですが、この際、長い間ほつておいた友田純一君の遭難碑にお参りして、花のひとつあげたいと思います。当時遭難碑建設に参加された方々、あるいはそれ以外の方々、ぜひ今年の夏の休暇を思い出の五色ヶ原でごしましよう。日時・コースの予定は次のとおりですが、五色ヶ原から直ちに立山温泉へ下山など、変更は自由です。

八月十五日(木) 夜行出発

十六日(金) 富山：(電車・バス・ケーブル)  
：(室堂…一の越…ザラ崎…五色

ヶ原小舎)

十七日(土) 午前中墓参 午后平の小舎へ  
十八日(日) 平の小舎…黒部湖畔…黒四ダム…

(バス)…大町

参加御希望の方は、なるべく早い機会に幹事まで連絡を願います。

担当幹事 久保 孝一郎

根 本 大  
山 田 亮 三

五色ヶ原に行きませんか  
—友田純一君墓前山行のお誘い

# ヒンズークシユ通信

(3)

倉 知 敬

## サラグラール南面の谷へ

八月十二日は、ぼくらにとつてまつたく記念すべき日となりました。

まず、ノーバイズノン・ゾムとウドレン・ゾム南峰を登って、この日、原、佐藤之、久、味で、まつたく大変な仕事であつたことをつぼくの四人が勇躍ベース・キャンプに帰着し、遠征のオ一目標が無事成功裡に完了したのです。そして、それに加え、ぼくら四人が、ベース・キャンプのあるトティラス・ノークの草原に戻るのに相前後して、ずっと心配の種になつていていた宮武とアシュラフ大尉がひょっこり戻ってきたのでした。彼等二人は、負傷した池知に付き添つて、去る七月十九日ベー

天候不順のため飛行機がとばず、何かと不自由な旅行を強いられたあと、池知を無事送り届けて、彼等はその重責をはたしてくれました。それは未踏峰に登るのとはまた別の意と十日たらずで、もう一つじっくりと落ち着とうに感謝の念にうたれ、そしてまた、すべてが支障なくやりとげられたことを心からよろこびました。

その晩は、久し振りに池知を除く全員が一堂に会し、楽しい語らいの一時を過しましたが、話し合につけても皆の関心が集まることは、明日からどうしようか、ということでは十日あれば行つて帰つて来れるだろうと思つていたのに、十日経つても、何の音沙汰もなく、これはひょっとすると、何か大変なことがおこっているのではないか、と懸念して

には登つていませんし、宮武については、ほとんど登山活動の方は参加できなくて心残りです。一方、ぼくらに残された登山期間はあと十日たらずで、もう一つじっくりと落ち着いてやるには不足気味ですし、残されたこの辺りの山々はいずれも難峰ばかりで、軽々しく取付くとまた事故を起こしかねないようになります。ここは一つ慎重に考えねばならないという情況でした。

昼間は荷物の整理と休養にいそしむ他、ボーネー達には上のキャンプの荷の撤収に従事させる一方、夜は皆であつまつて善後策を考えました。皆、それぞれの立場から、最良の案と思われるものを言い合いましたが、いろいろな考えがあり、一体どれが最もにして最適であるかという判断は仲々難しい問題でした。

しかし、問題をにつめていくと、大体もの本質がはつきりしてきて、選択の余地が明

らかになります。すなわち、次のような三つのプランが今後選ぶべき方針として明らかになってきたのです。

(1)、一応目的をはたしたから、少々早いが  
これで下山し、あとは経済調査をする、とい  
う安全オ一の案。

(2) サラグラール南面の谷へ回ってみて、可能性を調べる。残された期間では殆ど登頂望み薄だが、やれるところまでやって帰る。登れなくてもかまわないから、安全第一で偵察する位のつもりで行く。

(3) ロシュ・ゴル谷の南側にある六千米級の未踏峰、アトラク、ムトチリ等を登る。六千米級なら、もう一つ位登れる余地あるだろうから、登頂し、特にまだ登っていない宮武にピークを踏ませて、彼の労をねぎらう。

話の引っかかりは、一体われわれはサラグ  
ラールへ登りに来たのではなかつたか、それ  
とも、とにかく未踏峰を登ることに価値を見  
出すべきなのか。或るいは遠征目的遂行のた  
めには犠牲をかえり見ないでいいか（特に官  
武の立場について）、山を登るだけでなく未  
踏査地域の踏査等についての考慮と、遠征目  
的の追求との関連性、等々、いろいろな要素

があります。話がこみ入つてくると、議論も感情的な対立にまで発展してしまって、かなりエキサイトしたところまで行つてしまふのです。どうもそのあと、何となくしこりが残りそうな雰囲気になつてしまい、これから何をやるにしろ、そんなことではまた事故を起こすもとなりそうなところもあつて、何か心配でしたが、結局のところ、何とかしてもう一つ登ろうという、若手グループの主張するオ三案が採られることに決まりました。もう一つピークに登るような計画は捨て、サラグラーの可能性を探るような東面の谷の偵察行をするにとどめようという、ぼくなどの主張する案は、皆の賛成するところとなりませんでした。

しかしながら、意外なことの成り行きから事情は大分変わつてしまふことになりましたすなわち、十七日、オ三案に従つてアトラク峰方面に偵察に出た佐藤之と宮武は、そちらにはまったく可能性あるルートを見付けることが出来ず途方にくれてしまつたかわり、一度その対岸に一望の内に見渡せるサラグラール南面の谷に、一條の希望ある登攀ルートを見出したのです。

グラートル南峰を登ることが出来るかも知れない、と佐藤之は興奮してベース・キャンプに報告して来ました。そうなると、もうほくらはまようことなく、サラグラール南面を試みるのに全精力をそそぎ込むことに決めました。サラグラール南面の谷は、ベース・キャンプから一日行程下流にあるドルーの疎林から分岐して拡がっています。そこで、ぼくらはまず、ベース・キャンプをドルーまで下ろしそこから登攀を始めたことにしました。十八日、ぼくらは住みなれたトティラス・ノークを去り、四〇人余のポーターを使ってドルーへベース・キャンプを移しました。ドルーの標高は大体三八〇〇米ですから七三五〇米のサラグラールに登るには実に三五〇〇米程の

高差があります。これを一週間余で片付けようといふのですから、相当なラッシュ・タク

テント間はなるべく長くとり、テント数を少なくてして荷上げ量をへらす、固定ロープ等は極力使わないという方針をとる一方、使えるところまではポーターを使おうというので氷河のアイスフォールの出てくる直下のところまで二〇人のポーターをつかって荷上げしそこをアドヴァンス・ベース・キャンプとし

て、実際にはそこを登山根拠地にすることにしました。

サラグラール南面の谷は、真中にある岩稜（これを中央岩稜と名付けた）をはさんで、左右に支谷を持っているが、この内右側のは、状態の悪そうな氷河におおわれていて望み薄です。左の方はかなり深く切れ込んでおり、その上には悪そうなアイスフォールがある、それもとても手に負えそうもなく当初はあきらめていたのだが、角度をかえて見ると、そのアイスフォールも何とかこなせそうだし、そこへ至る左側の隠れた深い支谷も佐藤之たちの偵察によつて、容易な登路であることが明らかになつたのです。最初、視界から隠れていて見えなかつたこの左側の谷は、後程ヒドン・ヴァレーと名付けられました。

#### ヒドン・ヴァレーを登る

さて、十九日、ぼくらはヒドン・ヴァレーの氷河碓石の上、四五〇〇米の地点にアドヴァンス・ベースを設けました。途中、ボーターラ達がストライキ起こすというイザコザもありましたが、どうやら事もなく、夏用テン一張のささやかな根拠地が出来ました。天気はずつと、雲の多い天気がつづいていて、気温も低目、すでに夏の好天シーズンは去つ

たのではないかと思われる程で、先行き心配でした。

翌二十日、普通なら偵察隊を出すところを、上のルートの偵察がなされ、オーキャンプへいきなりオーキャンプを設営するべく、未知のアイスフォールを登つて荷上げに出発しました。アイスフォールはもう裸の氷が露出していました。アイスフォールはもう裸の氷が露出して、クレバスも比較的安定した様子、夏の遅くの氷の状態は割と落ち着いています。

さて翌二十二日には、引きつづきオーキャンプが六三〇〇米の地点に設けられました。オーカラオニへは、中央岩稜への急な側壁を変わった状態ですが、これが意外に登りやすく、高度馴化もすすんでいるので、日本の山と変わりないペースで登ることが出来ます。全員そろつてかなりの量の荷を背負つて、苦しいけれど希望をもつてぼくらはサラグラールに対面しました。

午後二時頃には、中央岩稜近くのクレバス帯まで登ることが出来、高度も千米以上かかります。奥からオニへは、中央岩稜への急な側壁を変わった状態ですが、これが意外に登りやすく、高度馴化もすすんでいるので、日本の山と変わりないペースで登ることが出来ます。オーキャンプのテント地となりました。その他にこの辺りにはまったく平らなところはありません。その上方へは長い長い雪稜がどこまでも天へ向けて伸び上っています。もし許されるならば、もう一つテントを伸ばしてから登頂するようにしたいのですが、何しろ急峻な地形ですし、荷上げには相当な注意が必要な上、それをしている日数の余裕があります。彼はこの日はベースに停滞し、翌日オーキャンプへ登つて来ました。

出来的かどうかかなり難しいところですが、子よいと思われる佐藤之と原がオーキャンプに残り、他はアドヴァンス・ベースにもどり

ました。

そこに残り、荷上げした佐藤久とぼくはオーストリアへ戻りました。

この高みまで登つてくると、流石にヒンズ  
ークシユの真中に位置するサラグラールから  
は、周囲に居並ぶ有名な高峰が、いくつもい  
くつも重なつて見え、素晴らしい景観です。  
天氣も段々好天し、夏の終りの多分最後の好  
天の周期をどうやらつかめそうな気配です。

ティリチ・ミール、イストロ・ナルの堂々たる山々に伍して、前にほくらの登つた二つのピークが手にとるように眺められます。

二十三日、佐藤之、原の二人は早朝四時、頂上を向け出発しました。ビヴァークを予想して二人はキスリングを背負つての登行です。登りは中央岩稜に沿つていきますが、岩稜を越え、ペニテントの発達した雪稜を登り切る

と、上には更に氷の急峻な斜面がつづいています。高度も七千米近くなると、ペニテントのグスグスの斜面は、硬い氷の斜面と変わるので、彼等はステップ・カッティングをしつ

つ、苦しい登行を強いられます。この高度で重いキスリングを背負って、バランスを保つつつピッケルを振るう作業は、見る見る彼等を疲労させていきますが、登行は遅々としてはからず、斜面はどこまでも長くつづきま

○米の地点でした。

さて、翌二十四日、再び登高を開始した二人は、午前九時、とうとうサラグラール南峰の頂上にたどりつきました。

南峰の頂上からは、巾広いプラトーをへだてて北側に、イタリア隊の登った北峰が対峙し、その向うには、ルンヨー、ウルゲント等のヒンズークシュ北方の山々が望めました。

北は、南のティリチ・ミールを中心とする山

塊とくらべ、幾分小じんまりとしていて、ヒンズークシユはティリチーサラグラールが最も大きい、中心となっている山塊であることがよくわかります。

小一時間も頂上に滞在し写真撮影をすませた後、二人は帰路につきました。その日午后二時には、後詰めの三人の待機しているオーキャンプに到達、そのままオーキャンプを撤収してオーキャンプまで下りました。つづい

てオニ登頂をねらうことも考えましたが、かなりつまつた計画であることを考え、余裕もつづき翌二十五日にはアドヴァンス・ベースを撤収、一気にドルーまで戻り、ヒンズートクシュでの全部の登山活動を終えたのでした。

最後のサラグラール南峰登攀活動は、極めて短期間のものであり、あっさり勝負が決まりましたが、たとえこれが全登山活動にしめる期間としては短かかったとしても、それでもわれわれのこの山塊での試行錯誤を通じての体験や高度馴化、緊密なチームワークの成果であることが出来、文字通りこの遠征のクライマックスであったのでした。

（完）

三回に渡る倉知氏の「ヒンズークシュ通信」は、サラグラール登頂をもって終了させていただきます。

なお、遠征隊の活動は、「ロシュ・ゴルの山旅」という題名であかね書房より六月末に発刊されます。

ご期待下さい。

三回に渡る倉知氏の「ヒンズークシユ通信」は、サラグラール登頂をもって終了させていただきます。

なお、遠征隊の活動は、「ロシュ・ゴルの山旅」という題名であかね書房より六月末に発刊されます。

(完)

会務報告

中島 寛

日 時	一月十八日 六時半～九時	場 所	如水会館
出席者	中川、吉沢、手塚、望月、岩崎、大塚、佐野、山田、久保、松下、関、石原、吉田、中島、石、大賀、高崎、佐藤之、原、平川、田沼、学生儀以下九名	議 題	故中村慎一郎君鹿島槍遭難報告
出席者	中川、村尾、松木、近藤、増山、岩崎、佐々木、佐野、山田、久保、松下、柴崎、中島、小林（正）、大賀、倉知、長沢、小島、佐藤之、佐藤久、吉川、加藤、宮武 以上二十三名	学 生 より遭難時の状況等、又遺体収容に当った会員よりの報告にひきつづいて、今度の遭難に対する姿勢、今後の部のあり方に対するアドバイス等、活潑な意見が出された。	學生より遭難時の状況等、又遺体収容に当った会員よりの報告にひきつづいて、今度の遭難に対する姿勢、今後の部のあり方に対するアドバイス等、活潑な意見が出された。
日 時	二月三日夜～二月五日	四、中村君葬儀に参列の件	四、中村君葬儀に参列の件
場 所	志賀高原・蓮池	五、幹事交代の件	五、幹事交代の件

日 時	二月三日夜～二月五日	場 所	志賀高原・蓮池	議 題	一、昭和四十二年度活動及び決算報告
参加者	久保・松下・原田・石・倉知・長沢 小島・佐藤之・佐藤久	参加者	久保・松下・原田・石・倉知・長沢 小島・佐藤之・佐藤久	出席者	中川、吉沢、手塚、望月、岩崎、大塚、佐野、山田、久保、松下、関、石原、吉田、中島、石、大賀、高崎、佐藤之、原、平川、田沼、学生儀以下九名
針葉樹会の中心的な催しものとして多数の方の参加を呼びかけたが、あまり多く集まらず、場所も妙高・笠ヶ峰の予定が、大雪で志賀高原に変更されたが、和気あいあい、楽しいスキーだった。なお、針葉樹会より若干経費を援助した。	針葉樹会の中心的な催しものとして多数の方の参加を呼びかけたが、あまり多く集まらず、場所も妙高・笠ヶ峰の予定が、大雪で志賀高原に変更されたが、和気あいあい、楽しいスキーだった。なお、針葉樹会より若干経費を援助した。	出席者	中川・吉沢・久保・松下・大賀（幹事）中島・山本（尙）・長沢・平川	出席者	中川・吉沢、手塚、望月、岩崎、大塚、佐野、山田、久保、松下、関、石原、吉田、中島、石、大賀、高崎、佐藤之、原、平川、田沼、学生儀以下九名
三、拡大評議員会	三、拡大評議員会	五、定例評議員会	五、定例評議員会	六、会員異動	六、会員異動

出席者	中川・吉沢・久保・松下・大賀（幹事）中島・山本（専）・長沢・平川	出席者	中川・吉沢、手塚、望月、岩崎、大塚、佐野、山田、久保、松下、関、石原、吉田、中島、石、大賀、高崎、佐藤之、原、平川、田沼、学生儀以下九名
出席者	中川・吉沢・久保・松下・大賀（幹事）中島・山本（専）・長沢・平川	出席者	中川・吉沢、手塚、望月、岩崎、大塚、佐野、山田、久保、松下、関、石原、吉田、中島、石、大賀、高崎、佐藤之、原、平川、田沼、学生儀以下九名
出席者	中川・吉沢・久保・松下・大賀（幹事）中島・山本（専）・長沢・平川	出席者	中川・吉沢、手塚、望月、岩崎、大塚、佐野、山田、久保、松下、関、石原、吉田、中島、石、大賀、高崎、佐藤之、原、平川、田沼、学生儀以下九名
出席者	中川・吉沢・久保・松下・大賀（幹事）中島・山本（専）・長沢・平川	出席者	中川・吉沢、手塚、望月、岩崎、大塚、佐野、山田、久保、松下、関、石原、吉田、中島、石、大賀、高崎、佐藤之、原、平川、田沼、学生儀以下九名
出席者	中川・吉沢・久保・松下・大賀（幹事）中島・山本（専）・長沢・平川	出席者	中川・吉沢、手塚、望月、岩崎、大塚、佐野、山田、久保、松下、関、石原、吉田、中島、石、大賀、高崎、佐藤之、原、平川、田沼、学生儀以下九名

会計幹事よりの決算報告につづいて、特に今年度決算の繰越欠損に関連して、会費徴収方法・値上げ等が検討されたが、会費値上げの線で検討すること、徴収方法については新会計幹事の下でより合理的な方法を検討すること、及び会報の発行は年最低四回、定期刊行を厳守する事、等の基本方針が出て、今度の遭難に対する姿勢、今後の部のあり方に対するアドバイス等、された。

旧幹事の任期満了に伴ない、この日内定した今年度の幹事は次の通り。カッコ内は担当。

山本健一郎（幹事長・新任）  
佐藤之敏（総務・新任）  
佐藤久尚（総務・新任）  
原博貞（会計・新任）  
平川紀男（会報・留任）  
齊藤正（会報・新任）  
中村雅明（山行企画・新任）

議題一、昭和四十二年度活動及び決算報告会計幹事よりの決算報告につづいて、特に今年度決算の繰越欠損に関連して、会費徴収方法・値上げ等が検討されたが、会費値上げの線で検討すること、徴収方法については新会計幹事の下でより合理的な方法を検討すること、及び会報の発行は年最低四回、定期刊行を厳守する事、等の基本方針が出て、今度の遭難に対する姿勢、今後の部のあり方に対するアドバイス等、された。

旧幹事の任期満了に伴ない、この日内定した今年度の幹事は次の通り。カッコ内は担当。

山本健一郎（幹事長・新任）  
佐藤之敏（総務・新任）  
佐藤久尚（総務・新任）  
原博貞（会計・新任）  
平川紀男（会報・留任）  
齊藤正（会報・新任）  
中村雅明（山行企画・新任）

議題一、昭和四十二年度活動及び決算報告会計幹事よりの決算報告につづいて、特に今年度決算の繰越欠損に関連して、会費徴収方法・値上げ等が検討されたが、会費値上げの線で検討すること、徴収方法については新会計幹事の下でより合理的な方法を検討すること、及び会報の発行は年最低四回、定期刊行を厳守する事、等の基本方針が出て、今度の遭難に対する姿勢、今後の部のあり方に対するアドバイス等、された。

旧幹事の任期満了に伴ない、この日内定した今年度の幹事は次の通り。カッコ内は担当。

山本健一郎（幹事長・新任）  
佐藤之敏（総務・新任）  
佐藤久尚（総務・新任）  
原博貞（会計・新任）  
平川紀男（会報・留任）  
齊藤正（会報・新任）  
中村雅明（山行企画・新任）

旭台団地 B九の九

(五八二)六一一内線(三七九)

覚張泰三 習志野市大久保町一の五三四

永井新也 大阪市住吉区住吉町一四四

三股 宏 新潟市青山下山一〇六六の五

越路莊

大建二郎 豊島区目白二丁目八番四号

日本合成ゴム目白社宅

(九八七)七〇三二

倉知 敬 練馬区豊玉中三の一の四 大野方

(九九二)六四一三

三森茂充 習志野市鶯沼町一の四二六

加藤正巳 名古屋市緑区鳴海町字赤塚一五五

三井信託銀行鳴海寮

〔勤務先変更〕

中村 保 Karachi Representative

Office, Ishikawa jima-

Harima Heavy Indus-

tries Co., Ltd.

Dada Chamber (2nd floor)

Bunder Road Karachi,

West Pakistan.

表紙写真  
サラグラール西面を望む

日本ナショナル金銭登録機(株)

インダストリアル・フィナンシャル・コマ

ーシャル・システム部外国商社担当

課

原 博貞 千代田区神田美土代町一

住友商事(株)東京鋼管部特殊管

オ二課(二九〇)四一一(代)

港区赤坂二の三の六

齊藤 正 (株)小松製作所 営業管理部管

理オ一課(五八四)七一一(代)

千代田区丸の内二の十六千代田ビ

ル別館

三菱油化(株)計数課

加藤正巳 名古屋市中村区広小路西通三の十

九 三井信託銀行名古屋支店

(○四七四)(七二)四四五二

大建二郎君は四月二十日めでたくゴールイン

しました。

〔ご結婚おめでとう〕

幸か不幸か、今年度もう一年、会報の編

集をするチャンスを与えられました。

新規一転、新任の齊藤 正君(昭和四十二年卒・小松製作所営業管理部管理オ一課勤務)とともに、積極的な姿勢で編集にとりくみたいと思います。

こちらからも原稿依頼致します。会員諸兄もドンドン原稿お寄せ下さるようお願い致します。

(平川記)

編集後記

年六回発行の予定が結局四回発行で終りになってしまった。しかも、内容的に見ても、オ十九号の編集後記に書いたように、「会員と会員の心を結ぶ糸でありたい」との編集の意図にもかかわらず、私自身でも不本意な内容になってしまった事を、私自身反省するとともに、会員諸兄にお詫び致します。



